

東洋学報

第七十八卷第三号

平成八年十二月

論説

元代雲南の段氏総管

林 謙一郎

はじめに

一二五三年、クビライおよびウリヤンカダイらの率いるモンゴル軍は四川南西部・チベット東部を経由して雲南に侵入、一二月、大理国（後理国^①）の首都である大理城を占領した。国王段興智および相国高太祥（高昇）は東方へ脱出したが、翌年、高太祥は統矢邏（今の姚安）で敗れ、段興智も善闡（昆明）で捕われた。五城・八府・四郡・三

元代雲南の段氏総管 林

第七十八卷 二四五

十七部といわれる大理国の版図はモンゴル政権の支配下に編入され、南詔国以来約五百年間継続した雲南地方の独立・半独立政権の時代は終わりを告げた。一般に、これをもって雲南地方が本格的に中国王朝の版図に組み込まれた最初とする。

しかし、モンゴル治下の約一二〇年間をつうじて、雲南地方のかつての中心地域である洱海地区には後理国の王族段氏の末裔が大理総管を世襲した。その管轄範囲は初期には、少なくとも名目的には雲南地方の大半を覆っていた。のち雲南行省成立後はその下に属することになったものの、後期、とくに天曆の内乱以後、モンゴル王の権力が増大し、行省の統治が有名無実化した時期には、段氏は雲南西部を代表する勢力としてあらわれる。そしてこの二者の対立状況は、明軍が雲南に侵入し、両者を撃破するまで続いたのだった。

近年、中国史上・世界史上におけるモンゴル時代の画期性が注目されつつある。雲南民族史上においてもこの時期は大きな重要性をもつ。モンゴル族および契丹族³⁾、東トルキスタンおよびそれ以西のムスリムなど、新しい民族成分が雲南に流入したこともそのひとつである。

雲南の在来民族に関する具体的な史料状況からいっても、元代はひとつの画期といえる。各民族の名称・分布に関する史料の記載には、唐宋時期と元代の間で大きなへだたりがある。元代以降、明・清から近代にいたるまで、多くの民族についてその状況を史料上にあとづけることは決して困難ではない。ところがさらにさかのぼってある民族の通史を描こうとすると、そこに大きな溝があることに気づかされる。

むろん原因の一端は宋代の雲南民族に関する具体的な史料がきわめて乏しいことであり、すべての変化を元代に

帰することはできない。それにしても、雲南民族に関する研究が、とくにわが国においては南詔・大理国を中心とする古代民族の研究と明清以降の近代少数民族民族の研究に二極分解し、両者をつなぐ視点が得られていないのは、元朝治下の雲南民族の状況に関する理解が不足しているからにはかならない。

本稿は元代の雲南民族、とくに南詔・大理国の主要民族の一つであった白族の元代における状況を理解する一つの手がかりとして、大理総管段氏の実態を説明することをめざすものである。段氏については『南詔野史』をはじめ明清時期に編纂された雲南志書にはいずれも記載がある。

しかし諸書の記述を比較してみると、予想以上に異同が多いことに驚かされる。段氏の歴代の系譜さえ、ほとんど各史料ごとに部分的な違いが存在しており、ある特定の史料をもってこれを代表させることには無理がある。ところがこれまで、この系譜に関する総合的検討は一度もおこなわれておらず、清代乾隆年間の胡蔚『増訂南詔野史』⁽⁴⁾の述べるところを無批判に採用するのが常であった。

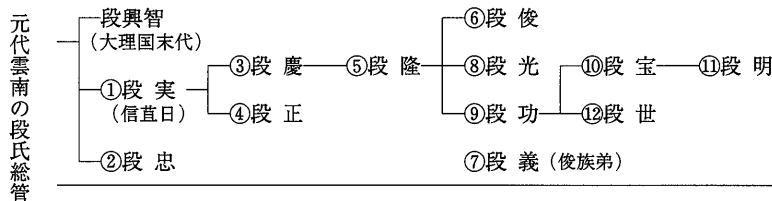
さしい一九七〇年代に大理市の五華楼遺址から宋元時期の碑刻が多数発見された。現在その一部分は大理市博物館で実物を見ることができる。また最近、これらを含む大理地方の重要碑刻の拓本・釈文がまとめて出版された。⁽⁵⁾これらを文献史料と比較対照することにより、これまで困難であった段氏の実態説明に大きな手がかりが得られることはいうまでもない。五華楼発見の碑刻の整理に携わった雲南師範大学の方齡貴教授も、すでに段氏の系譜についていくつかの見解を発表している。⁽⁶⁾本稿では氏の意見を参考にしつつ、段氏の系譜全体にわたってこれらの史料の比較検討をおこない、そこから明らかになる総管の継襲関係をつうじて段氏の権力構造の一端を解明したい。

一、大理国の滅亡と段氏総管の誕生

一二五四年、モンゴルに降伏した後理国皇帝段興智は、五六年、その季父信苴福⁽⁷⁾とともに入朝し、地図を獻じ、諸部を平定することを求め、同時に雲南の支配、徴税の法を奏上した。モンケは大いに喜び、段興智に摩訶羅嵯を称することを許し⁽⁸⁾、彼を諸蠻・白蠻の長に任じ、軍務に関しては信苴福に指揮させた。ついで段興智は国任を弟の信苴日に委ね、みずから信苴福とともに蠻熨軍二万を率いて兀良合台（ウリヤンカダイ）軍の前鋒となり、未征服地域の攻略、交趾遠征に参加する⁽⁹⁾。その後、段興智は入朝の途次死去したが、その子孫は元朝一代にわたって大理を中心とする雲南西部における最大の土官となった。これがいわゆる「段氏総管」である⁽¹⁰⁾。

モンゴル軍が雲南に侵入した当初、後理国において「高国主」と呼ばれた高氏が徹底抗戦の構えをとり、殺されたのに対し、国王段氏がはやばやと降伏し、その後もモンゴル統治者に協力的であつたことに關しては、後理国時代に実権を高氏に奪われ、「擁虛位而已」⁽¹¹⁾といわれた段氏がモンゴルとの關係を利用して勢力回復を企図したという見解がある⁽¹²⁾。たしかに高麗国の例などをみても、モンゴルがその周辺諸国において実権を擁する武断勢力を打倒し、王政復古をおこなつて、これを利用するという傾向があつたことは認められる。だが雲南のばあい、モンゴル軍侵入の経路、その目的などを考えれば、両者の対応に相違があるのは当然ともいえる。というのは段氏は大理地区を伝統的な権力基盤としていたが、高氏は「善闡侯」の称号が示す通り、むしろ昆明地区にその基盤をおいていた。モンゴル軍が大理から東進したとき、段氏がすでに大理を失つていたのに対し、高氏がみずからの根拠地善闡

図1 『増訂南詔野史』による段氏系譜



を守るべく最後の抗戦を試みた、という立場の違いは考慮しなければならない。

さらに、このモンゴル軍の遠征自体が最初から南宋に対する側面攻撃・ないしベトナム北部經由の背面攻撃のルート・補給基地として雲南を確保しようとするものであった。その意味では貴州・湖北方面へのルートの入口である昆明地区こそが重要であり、東南アジア北部へのとば口である大理地区は（段氏にとっては幸いなことに）あと回しでよかった。

モンゴル軍はまず昆明地区を拠点化する必要があった。高氏が徹底的に叩かれたのも当然であるといえよう。南宋平定後、西北・四川方面と南中国を結ぶネットワークを考えた場合も、この重要性は変わらなかった。雲南行省が中慶路（昆明）を中心に設置され、現在にいたるまで昆明地区が雲南省の中心としての地位を確立しているのも、まさにそのためなのである。

さて、段氏総管に関しては段実（信直日）を初代とし、傅友徳のひきいる明軍によって囚われた段世までの十二代が伝えられている。¹³ 図1に掲げたものが現在もつともよく用いられている『南詔野史』胡本の述べる系譜である。

ところが、これら各代の間の系譜関係に関しては、テキストによる異同がきわめて多い。これは明代以降、段氏に関する史実、とくに四代―七代に関するものがほとんど伝えられていなかったことによるものである。そもそも、この種の史料のうち比較的初期のものに

属する『演載記』⁽¹⁴⁾『南詔源流紀要』⁽¹⁵⁾などでは、第四代段正一第七代段義に関しては、その事蹟はおろか、系譜關係すら伝えられていないのである。後述するように、これに関しては意図的に事実が隠蔽された可能性も高い。また各史料の編者がそれぞれ恣意的な整理をおこなっていることも原因の一つである。ただ、このような異同のゆえに、かえって各史料の比較検討により本来の系譜をある程度まで復元することが可能になっている。以下やや煩瑣になるが、初代から順を追って段興智から段世までの系譜を検討していきたい。

二、「大理国主」から「大理総管」へ

段興智はモンゴルの交趾遠征に参加後、入朝の途次に死去したとされている。だが一二五九年、兀良合台が南宋領内へ侵入した際の軍団の中にも「蛮獠万人」が見出され、⁽¹⁶⁾これにも段興智、信苴福らが参加していた可能性が高い。『演史』⁽¹⁷⁾『演雲歷年伝』⁽¹⁸⁾などが興智の入朝を中統元年（一二六〇）のこととするのもこれと関係があるだろう。『元史』世祖紀によればこの年の一二月に礼部郎中孟甲・礼部員外郎李文俊が安南・大理に使いしており、⁽¹⁹⁾松田孝一氏はこれを段興智の死を弔うものとする。⁽²⁰⁾

つぎに、『演載記』以下の史書はいずれも段実（信苴旦）を初代の大理総管とするが、『元史』世祖紀には中統元年六月に石長不なる人物を「大理国総管」とし、虎符を与えたとする。松田氏は石長不と音の上で近い人物として段興智の下で軍事権を握った信苴福をあげているが、これは以下に述べるような段氏総管の実態をみれば充分に想定しうる状況である。信苴福は『元史』信苴旦伝では段興智の季父、『野史』胡本では季弟とされているが、列伝

に従うべきであらう。

翌中統二年六月、段実が入朝、虎符を授けられ、大理・善闡・威楚・統矢・会川・建昌の諸城の管領を命じられる。⁽²¹⁾『南詔野史』にはこのときのクビライの勅文を載せており、その中に「可革帝号、錫以虎符」すなわち、このとき初めて正式に段氏の皇帝号を削ったとある。前述の「摩訶羅嗟」の称号も、碑文などでは段興智に言及する以外に使われておらず、同時に削られたとみるのが妥当であらう。段実は『元史』信苴日伝を含め多くの史料が段興智の弟とするが、嘉靖『大理府志』⁽²⁴⁾のみ興智の子とする。

中統四年（一二六三）には大理に元帥府が設置され、翌至元元年に威楚（今の楚雄）以東の現地民族が「妖僧」舍利畏を指導者として反乱を起こした際には、段実は李羅（ボロト）、都元帥也先（エセン）らと協力してこれを下し、三年には入朝してクビライの賞を受けている。⁽²⁵⁾

さらに至元四年にはクビライの第六子忽哥赤（フゲチ）が雲南王に封じられ、⁽²⁶⁾王相府、大理等処行六部などの統治機構も次第に整備されてゆく。このプロセスに関しては松田氏の研究に詳しい。⁽²⁷⁾至元七年（一二七〇）には善闡・大理などの万戸府が路に改められた。⁽²⁸⁾このとき中慶路ダルガチに任じられた愛魯（アイルク）は同時に爨煥軍を掌握している。⁽²⁹⁾これをもって段実が爨煥軍に対する指揮権を剥奪されたとみる見解があるが、段氏はこれ以降も都元帥の職を保持しており、爨人を中心とする少数民族軍の総称と思われる爨煥軍⁽³⁰⁾がこの時すべて愛魯によって掌握されたのかどうかは不明である。

至元一〇年（一二七三）閏六月、雲南行省設置の命が下る。⁽³¹⁾この年の二月、襄陽の呂文煥が元に降伏しており、

雲南行省の設置も来たるべき南宋大進攻に備え、側面の安定をはかる意味あいがあった。こうして雲南に行省・モンゴル宗王・段氏の三者が並立する情況が生まれた⁽³²⁾。

これらの機構整備により段氏の実権がそれまで以上に掣肘を受けたであろうことはいうまでもない。一一年に初代雲南行省平章政事となった養典赤（サイド・アジャッル）が任地に至ると⁽³³⁾、段氏は改めて大理総管に任じられる⁽³⁴⁾。これは以前の「大理国総管」「大理国主」が漠然と旧大理国の領域をあらわすのとは異なり、あくまでも「大理路」総管であった。このことは、これ以後段氏は舍利畏の二度目の反乱の鎮定（二一年）、西南部のタイ族地域に侵入した緬国に対する出兵（一三年）などに対し、元朝が褒賞として与える肩書が大理蒙化等处宣撫使、大理威楚金齒等宣慰使都元帥、と変化していくことによってもうかがえる。

さらに至元一八年（一二八二）、息子の阿慶をともなつての入朝に際し、段氏は雲南行省参知政事の位を与えられる。その後、『元史』信直日伝によれば彼は至元一九年緬国遠征軍にしたがう途中で病没したとするが、『南詔野史』王松本は⁽³⁵⁾大徳元年（一二九七）に没したとする。これについては方齡貴氏が『大勝寺修造記』⁽³⁶⁾に「至元二一年甲申歳、雲南省参政段昔直日奏聞朝廷」云々とあり、また『創建大理路儒學碑記』⁽³⁷⁾に

至元乙酉之春准奏、始立廟學、設教官、令趙傅弼充其職、中奉大夫雲南諸路行中書省参知政事郝公天挺実倡其議、大理路軍民総管段信直忠聞而喜曰……

などとあることから（至元乙酉は二二年（一二八五）、二二年から二三年の間に段氏が没し、段忠が継いだとの見解を出している⁽³⁸⁾）。ただし次節でも述べるように、新総管の就任がかならずしも先代の死をあらわすとはいえない点に

段氏総管の複雑性がある。

三、総管の二人並立体制

つぎに第二代（信直福を計算に入れると第三代となるが慣例にしたがう）総管に関しては、『元史』信直日伝では段実の子阿慶が継いだとされているが、『野史』各本はいずれも段慶の前に段忠をおく。段忠が実在であることは右に引いた『創建大理路儒学碑記』からも証明される。『野史』王本や『滇考』⁽³⁹⁾『契古通紀浅述』⁽⁴⁰⁾などでは段忠は段実の子に作るが、『大理府志』『野史』胡本、『歷年伝』などは段実の弟に作る。ところが『元故副相墓碑』⁽⁴¹⁾には

中奉大夫段信直実、正奉大夫元帥信直忠報国家、（中略）中奉大參愛其能、時宗弟正奉元帥有善聞之封：

とされており、中奉大參とは上に中奉大夫とあり、雲南行省參知政事（＝大參）であつた段実のことであるから、段忠が段実の弟であることが明らかになる。また『南詔野史』の早期のテキストである南京図書館蔵抄本、淡生堂蔵抄本⁽⁴³⁾などは段忠を「段」道隆の子に作る。段道隆という名は歴代の大理王・大理総管中には見あたらないが、第二一代大理国王段祥興が南宋の嘉熙二年（一二三八）に即位後「道隆」と改元しており、これを指すものである⁽⁴⁴⁾。段祥興は段興智・段実の父に当たるから、やはり段忠が段実の弟ということで一致する。

いっぽう『元史』信直日伝において段慶が段実を継いだとみなしていることにも根拠がないわけではない。『大理府志』卷一沿革史証の關係部分は次のように記載されている。

十九年、詔信直日同右丞答兒迎征緬師、卒。弟忠以功授大理等処宣慰使兼管軍民万户府。以信直日子慶為大理

等処宣慰使都元帥、佩金虎符。

『歷年伝』の記述もこれとほぼ一致する。つまり、段忠と段慶は同時期にそれぞれ宣慰使、宣慰使都元帥に任じられているのである。これはモンゴル軍に投降した直後の段興智が国政を委ねられ、信直福が軍事を領したのと同じ構図であるといえよう。『野史』淡本・王本によれば段忠は中統四年に十五才で闊木（闊朮クチュ？）にしたがつて両林・芒部・会川など（雲南北部―四川南部の彝族地域）を討ち、至元二年には曲靖を攻め、九年には武定を伐つなど武功をあげている。これらがいずれも段実生前であることに注意すべきである。

段忠がいつごろまで存命したかは明らかではない。『野史』淡本・王本および『歷年伝』などでは己亥の年（大徳三、一二九九）に没したとされている。胡本では在職わずか一年で至元二〇年（一二八三）に没したとしているが、これは『創建大理路儒学碑記』と矛盾する。このあたりは忠と慶が同時期に宣慰使兼管軍民万户府、宣慰使都元帥となっていたことを理解していない編者が操作をおこなった結果であろう。

第三代の段慶については、史書には段実の子とするものと段忠の子とするものと二説あるが、泰定二年（一二三二五）の『大崇聖寺碑銘並序』には「段実款附而来、…子慶番侍春宮、父子並以宣慰、元帥之節、繼參大政始終。」とあつて段実の子であることが証される⁽⁴⁵⁾。

第四代の段正に関しては『野史』各本、および『滇考』『歷年伝』がいずれも段慶の弟とすることと一致するが、『大理府志』は段正を欠き、『元史類編』卷四二大理伝は正を忠の子とする。また第五代段隆に関しては『野史』南京本、王本は段正の子とし、淡本および胡本、『滇考』『歷年伝』などには段慶の子とあつて一致しない。だが前述

の『元故副相墓碑』には

襲中奉大參段公慶有知人之鑒、相副官遂委摯事之、而忠礼節伸、君臣道契、顧托其嗣蒙化太守信直隆、俾輔導之、由是陳力就列、自州牧升路侯、官至中順大夫、大理路軍民總管。

とあり、段隆が段慶の子、というのは動かしがたい。なお同時に、この記述から段慶が段実の後を継いで中奉大夫・參知政事となつてゐることがわかる。

段慶と段正の關係で注目すべきは、一九八四年に大理市で発見された大德一一年（二三〇七）の『加封孔子聖詔碑』^{〔46〕}に、

鎮国上將軍大理金齒等處宣慰使都元帥段阿慶

明威將軍大理路軍民總管段信直政 等立石

と二名が併記されてゐることである。さきの段忠・段慶に関する『大理府志』の記載と比較すると、段慶はいぜんとして宣慰使都元帥の職を保持している。段正の大理路軍民總管は『創建大理路儒學碑記』中の段忠の肩書と一致している。

段興智と信直福、段忠と段慶、段慶と段正という三例をみると、このように兄弟、叔甥などの關係にある二名がそれぞれ宣慰使都元帥・軍民總管などの職をもつというのが当時の段氏にとつて常態となつてゐたことがわかる。

『元故副相墓碑』では段慶が中奉大參すなわち中奉大夫（文散官・從二品下）であり、段隆が中順大夫（同正四品下）となつてゐたのに対し、『加封孔子聖詔碑』では段慶が鎮国上將軍（武散官・從二品下）、段正が明威將軍（同正四品

下)であり文散官と武散官の違いがあるが同じ位置にあることも注目にあたいる。これは『元史』百官志の述べる宣慰使および副使の位階にまさに対応しているのである。⁽⁴⁷⁾ここからすれば、段氏の中でその時のトップに立つ人物が宣慰使都元帥となり、文字どおりの大理路軍民総管となるのはそれに次ぐ第二位の人物なのではないかという見方でもできる。

また、段慶が前半が段忠と、後半には段正と並立しているのをみても、宣慰使都元帥と総管の二名は同時に任免されるわけではなく、その在職時期にはずれがある。『大理府志』で大理等処宣慰使、兼管軍民万戸府、『創建大理路儒学碑記』では大理路軍民総管とされている段忠が『元故副相墓碑』では正奉大夫(従二品上・都)元帥となっていることから、両者の間の異動、ないし昇任も生じていることがわかる。

ところが、このように段氏が二つの異なる職を世襲していたことは、後代の史書編者には理解されていなかったようである。彼らはこの二系統の職、および雲南行省参政、平章といったものをすべて「段氏総管」の名のもとに一括し、しかもこの「総管」という唯一のポストを段氏が順に世襲したかのように史実を「編集」しているのである。実際には二つの並立する職であるものを一つの時系列にまとめようとするわけであるから、代をくだるにしたがつて現実との時間的なずれが生じてくることは避けがたい。そのため史書の編者たちは各代の在職期間、系譜関係などにそれぞれ操作をおこなわざるをえなかった。『演載記』『南詔源流紀要』などの初期の史書は単に各代の名を列記するだけであつたものが、『南詔野史』の抄本、王崧本にいたって系譜関係が記されるようになり、胡蔚の『増訂南詔野史』にいたって各代の在職期間が明記される、という記事内容の充実は、史実を反映したものという

より、むしろこのような矛盾に対する合理化の過程であるとみななければならない。胡本が一二代の総管のうち実に五代を「在職一年」とせざるをえなかったのも、まさにそのためなのである。

四、段俊―段功の系譜——隠された対立抗争——

さて第五代段隆は延祐三年ないし四年（一二一六―一七）に総管職をついだとされ、年代も諸史料ではほぼ一致する。四代段正の死はこれに合わせて延祐三年とされているが、『野史』王本では皇慶元年（一二二二）の記事に続けて「五年正卒、子隆繼」とする。皇慶に五年はないので、延祐五年を指すものであろう。王本でも段隆が総管となったのは延祐四年としているから、ここでもまた重複が生じることになるが、右にも述べたようにかえってこちらの方が実際に近いと思われる。

第六代段俊に関しては段隆の子、ということと諸史料が一致しており、近出の『故大理路差庫大使董踰城福墓誌銘』⁽⁴⁸⁾にも「（上闕）総管信直隆、孫総管信直俊三代所（下闕）」とあってこれを裏付ける。段俊は致和／天曆元年（一二三八、九月改元）（『野史』淡本・王本）または至順二年（一二三三）（『野史』胡本）に老年のため退閑した段隆に代わって総管となり、天曆元年（王本）／至順元年（淡本）／二年（胡本）に雲南行省平章の位を授けられた。「段平章」という段氏総管の別名はこれに始まる。段俊の時代は短く、至順二年（胡本）／三年（王本）には早くも没した、とされている。年代などに異同も多いが、他に碑文史料なども残されておらず考訂は困難である。しかし先代段隆の存命中に総管を継いだにもかかわらず、わずか二―三年で没し、その原因が何ら説明されていないことには何か

不自然さを感じる。というのも、次の第七代段義から第九代段功までの系譜には非常に大きな疑問が存在するからである。

段義は『野史』南京本では段俊の子となっているが淡本・王本は「隆の族弟」とする。また胡本および『歷年伝』『滇考』『癸古通紀浅述』などは「俊の族弟」に作る。世代からいうと隆の代から俊の子の代まで実に三代代の幅がある。だが多くの史料が段義が段慶―段隆―段俊とつづいた総管家の嫡系ではないと述べるのには何らかの根拠があるものと思われる。これらの史料では（段義を段俊の子とする南京本を含む）、段義が当初「代父職、授蒙化知州」と述べており、蒙化知州であつた段義の父がいかなる人物かが問題である。

段氏と蒙化州（南詔王蒙氏の故地、今の巍山）との関係は浅からぬものがある。すでに述べたように段実は大理蒙化等処宣撫使となつたことがあるし、段正は『野史』諸本に「招蒙化山中生爨入籍」とある。また段隆が「元故副相墓碑」に「蒙化太守信直隆」と称されていることは右に引いたとおりである。さらに至正二十七年（一三六七）の『故智周術妙円鑑大師墓銘』⁽⁴⁹⁾には「前蒙化知州段信直賢及公子寿等」の語があり、段氏が確かに蒙化知州を世襲していることがわかる。段氏は南詔国時代以来の大姓であり、現在の大理白族にも非常に多い姓であるが、信直とあるから大理王の段氏の流れであり、総管の段氏とも血縁関係のものである。

段義が蒙化知州を継いだ時期は明確ではないが、その後、阿容禾の乱の討平を助けた功績によつて参政に進んだとされている。これは次節に述べるように、至順元年に諸王禿堅（トゥゲル）、万戸伯忽（バイク）、怯朝（不明）らとともに中慶路において反乱を起こした阿禾（アグーア）⁽⁵⁰⁾のことを指すものであろう。第六代の段俊が平章となつ

たのも天曆元年―至順二年の間であると考えられるから、この時期、少なくとも至順二―三年ごろには、雲南行省平章の段俊と参政段義の二名が同時に存在したことになる。総管の二名並立体制という観点からすれば、ランクはやや高すぎるがあり得ない事態とはいえないだろう。ただ諸史料はここでも同様に段氏総管を一本の系譜にまとめようとしている。『野史』胡本がこの事件を至順三年にかけているのは、段隆・段俊の継位／卒年と整合をとるための意図的な改変であるにちがいない。また『蒙兀児史記』⁽⁵¹⁾に「義、光父子依通志似止知蒙化州、未襲大理総管。」とあるのも同様の発想であろう（義と光の関係については次に述べる）。しかし『故神功梵徳大阿左梨趙道宗墓碑』⁽⁵²⁾には「至元二年伐车里、泊六年伐木邦之二役、総兵官（闕）……委路侯総管段信直義馳檄諸公為（闕）」の語があるため、かつて総管の職にあったことは否定しがたい。

段隆に関する「蒙化太守」という記述や、のちの段功の例をみても、総管就任前に蒙化知州を経験する、というのを段氏の任官経路として想定することは可能である。しかし、これまでの二名並立が兄弟相統を含みながらも、ともかく直系の中でおこなわれたのに対し、傍系の段義が総管・参政となったのはやはり異例であった。さらに、わずか一―二年の後、『野史』南京本では至順中、王本では後至元元年（一三三五）、胡本では元統元年（一三三三）、「隆の子」といわれる段光が「国事を主どる」という事態が生じる。しかも段義は史書には至順三年に没した、とされているものの、右の『故神功梵徳大阿左梨趙道宗墓碑』からは至正六年（一三四六）に段義がなお総管の職にあったことがわかるし、⁽⁵³⁾近年大理州南部の鳳儀県で発見された経卷には至正九年（一三四九）の段信直義の題記があるというから、⁽⁵⁴⁾義の存命中にすでに直系の段光が登場してきているのである。

第八代の段光も疑問の多い人物である。まず各史料では光を「隆の子」であるとしているが、実はこれは疑わしい。段隆の後、子の俊がすでに総管を継いでいるにもかかわらず史書が一致して「隆の子」といい、俊との関係に触れないのも奇妙であるが、『京兆郡夫人墓誌⁽⁵⁵⁾』は

（上闕）辛丑冬十二月某日、中奉大參勝公遺其貴弟段忠翊光來蒼山、持妣夫人行狀……

といい、しかも文中でしばしば「二子」「二公」という表現が使われているため、段勝と段光の二人が墓主である高薬師娘⁽⁵⁶⁾の子であり、しかも他に兄弟のないことがわかる。したがってこの二人は少なくとも段隆の嫡子Ⅱ段俊の実弟とは考えられない。また二人の父、高薬師娘の夫については碑文は「中奉先君」というのみで名前を挙げず、薬師娘の没した元統元年（一三三三）より前に没していたことがわかるから、至正九年に存命であった段義の子というのも不可能である。むしろ年代からいうと、至順二―三年に没したという段俊の子である可能性が高い。

また段光の没年は『野史』類では至正四年（一三四四）とするが、これは次の段功の「至正四年襲蒙化知州」に単純に合わせたものにすぎない。王本はその前年、至正三年に「紅巾陷雲南」と記す。淡本は年を明記しないが同様の記述がある。ここにいる紅巾軍の雲南侵入とは、明玉珍の部将万勝の軍が建昌より入り梁王を敗走させた事件を指しているが、これは至正二年（一三六三）のことであり、至正三年ではありえない⁽⁵⁷⁾。『京兆郡夫人墓誌銘』の「辛丑」は至正二一年に当たり、これも段光が少なくとも至正二〇年代のはじめに存命であることを示している。

二一年の時点で段光は忠翊校尉（武參官、正七品）にすぎないが、『野史』淡本・王本の段功条の至正一五年には「先是參政段光令高蓬督兵羅那閩、梁王使人暗招之、蓬不從、答以一詩云……」とあって段光はかつて參政位を有し

たかのであるし、次に引く『明太祖実録』のいう「平章段光」が事実だとすれば二二年以降、あるいは紅巾軍鎮圧と何らかの関係があるかもしれない。

『京兆郡夫人墓誌銘』にみえる段勝は「中奉大参」すなわち中奉大夫・雲南行省参政であり、段実―段慶の例からいっても、当時の段氏の首位に立つ人物であるとみなさざるをえない。また『明太祖実録』⁽⁸⁾には洪武五年に翰林侍制王禕が雲南にもたらした詔書を載せるが、その文中に

惟爾梁王把都・平章段光・都元帥段勝守鎮雲南、亦嘗遣人告諭、…

とある。つまり、史料の上で段光「主国事」とされ、元の梁王と大々的に抗争を演じた時期は、実際には段勝・段光兄弟の時代だったのである。ところが、現存する『南詔野史』など雲南地方志類では段勝は大理総管に数えられていないばかりか、その名さえ全く挙がっていない。むしろ、段勝が文字どおりの大理路軍民総管を経験したかどうかは不明であるが、段実・段慶いらいの段氏の肩書である「中奉大参」を称している段勝に関して、各史書が一言も触れていないのはやはり不自然であり、なんらかの作偽が感じられる。

さらに、第九代の段功は光の弟とされているが、これも『京兆郡夫人墓誌銘』の「三子」「二公」という表現からすると疑わしい。『野史』各本や『大理府志』に「襲蒙化知州」といわれていることから、むしろ段義との関係が深いとみなすべきである。段功が蒙化知州を継いだのは至正四年（胡本では五年）とされるが、胡本によれば六年には「木邦の思可」（実は麓川の死可伐）を元朝が征討した際、前鋒となって戦績をあげ、その功によって、大理総管、ついで参政を授けられたという。『故神功梵徳大阿左梨趙道宗墓碑』ではこの征討に段義が関与していた

と述べられていたことにも注意すべきだろう。

いっぽう『歷年伝』では至正一二年に功に命じてはじめて大理総管を襲わせたとある。碑文史料ではまず至正乙未（一五年、一三五五）立石の『勅授鶴慶路照磨楊伯□墓誌』⁵⁹には「亜中大夫大理路軍民総管府総管段信直功篆額」とある。また『大光明寺住持瑞岩長老智照靈塔銘并序』⁶⁰には

至正癸卯、土官段亜中于雲南省有大功勛、冊功升為行省右平章、本鎮大理路、升為大理宣慰司。嗣男段信直宝、字惟賢、升為宣慰司世襲宣慰使、兼雲南省左丞。

とあり、また至正癸卯年（三三年、一三六三）の無名墓誌銘に「雲南諸路行中書省平章政事段信直功篆額」とあるのもこの記述を裏づける。段功が至正一五年以前に大理総管となり、二三年に雲南行省平章政事となった事實は動かしがたい。時期的にいつても、段功は段光の後嗣というよりもむしろ段義の後をうけて総管・平章となっている可能性が高い。

このように見てくると、至順年間から至正二〇年代にいたる約三〇年の期間、大理総管段氏の中に、実は系統を異にする二つの勢力が存在したことがわかる。その一つは段興智以来の大理王系総管の嫡流であると考えられる段勝―段光兄弟であり、いま一つは傍系の段義―段功（父子または兄弟）である。しかも、この両者はけっして平和的に並立していたわけではなく、たがいに分立抗争を演じていたのではないかという疑いが濃厚である。最終的に勝利をおさめたのが段義―段功一派であることは明らかであり、段功以後は、第十代段宝（功の長子）、第十一代段明（宝の子）、第十二代段世（宝の弟、明の叔）と系譜関係も各史書で一致し、不明確な点がない。また各史書の段氏総

管に関する記述は、段功にいたって急に内容が豊富になる。これと比較すると段勝―段光兄弟、およびその先代と目される段俊に関しては具体的な史料に乏しく、段勝にいたっては歴史記録から完全に抹殺されているのである。

だが、これは単なる段氏内部の主導権争いというだけにとどまらない。このような対立抗争の発生には、当時の雲南をめぐる歴史状況が大きな影響をおよぼしているのである。至順元年（一三三〇）、中慶路において禿堅、万戸阿不らが挙兵した。これは決して孤立した散発的な反乱ではなく、元の泰定帝死後の帝位継承に関する混乱に直接つながるものである。そのとき段氏は、あるいは段氏の各派はどのような対応をしてみたのだろうか。

五、段氏の内部抗争と天暦の内乱

泰定五年（一三二八）七月、泰定帝イスン・テムルが上都で没すると、大都では簽枢密院燕帖木児（エル・テムル）ら武宗（カイシャン）の二子を奉じるグループが行動を起こした。彼らはまず江南にあった次子の図帖睦爾（トク・テムル）を擁立して蜂起した。これに対し上都では左丞相倒剌沙（ダウラト・シャー）、泰定帝の甥であり、かつて雲南に鎮し、泰定三年以後は北辺にあった梁王王禪（オンシャン）らが泰定の子阿剌吉八（アリギバ）を立てて（天暦帝）これに対抗した。両者の抗争は大都側の全面勝利に終わり、図帖睦爾が即位した（文宗）。翌天暦二年、武宗の長子和世疎（コシラ）がアルタイ南部から帰還し、カラコルムの北で即位すると（明宗）、文宗はこれに譲位する構えをみせたが、明宗はわずか四日後に崩じ（燕帖木児・文宗らの陰謀であるという）、文宗が復位した。これがいわゆる「天暦の内乱」である。

両都の抗争に際し、西南ではまず四川行省平章囊加台（ナンギャタイ）が上都に帰附して挙兵したがのち鎮圧された。これにつづいて至順元年正月、雲南で禿堅・伯忽らを首謀者とする反乱が発生するのである。禿堅ははじめ上都において王禪らに加担していたが、敗戦後雲南へ逃れ、至順元年、万戸伯忽、阿禾、怯朝らとともに中慶で挙兵した。反乱は中慶路から烏撒・烏蒙・羅羅斯（今の雲南東北・四川南部）・大理一帯に広がり、元朝は四川・陝西・湖広・江浙・河南・江南など数省から十余万の大軍を調集し、翌年ようやくこれを鎮定した。⁽⁶²⁾

禿堅・伯忽らの反乱に関与したのは決して蒙古人・漢人などの元朝統治階層にとどまらず、現地各少数民族の上層の多くもそれぞれの利害をもとに反乱に加担し、あるいは元朝の反乱鎮圧に協力したのであり、まさに雲南における元朝の支配をゆるがしかなない大動乱であった。史書に「雲南安靜將五十載、變起倉卒、人心危懼」⁽⁶³⁾といわれ、至順三年四月には雲南行省の田租を三年の間免ずる令が出たが、同年五月にはすでに「雲南大理・中慶等路大飢」⁽⁶⁴⁾と報じられ、急遽鈔十萬錠が送られた。元統二年にいたってもなお「雲南大理・中慶諸路、囊因脱屑・敗狐反叛、民多失業、加以災傷民飢、請發鈔十萬錠、差官賑恤」⁽⁶⁵⁾といわれ、戦乱に起因する同地方の荒廃が並々ならぬものであったことがわかる。⁽⁶⁶⁾

このとき段氏の去就はいかなるものであったのか。奇妙なことにこれを具体的に物語る史料がほとんど存在していないのである。これに関して『蒙兀児史記』はすでに「大理不附逆、亦不助王師」といい、その原注に「頗疑當時大理独立、不受王府行省節制。」と述べている。⁽⁶⁷⁾また方慧氏は、段氏はこのとき、反乱にもその鎮圧にも参加せず、ただ兵を擁して自重し、自己の勢力を發展させるのに忙しかつたという。さらに反乱の結果として、行省がモ

ンゴル宗王の掣肘を受け、本来の機能をはたすことが次第に困難になってくる。もともと中慶を駐地とする梁王のほか、内乱の後には、がんらい大理がその駐地であったモンゴルの雲南王も中慶に長駐することが常態化している。つまり大理はすでに雲南王が足を踏み入れることを許さなかったのであり、これも段―元関係に変化のあったことを示しているという。⁽⁶⁸⁾氏の意図が段光時期の段氏―梁王全面対決の前段階として天暦の内乱をとらえることにあるのは明らかである。

いわゆる段元「分庭構隙」の時期、すなわち至順元年から至正二六年（一三六六）の間、段氏と元朝の関係が一貫して非常に險悪であったわけではない。方慧氏もまたこの点は認めており、『中慶路増置学田記』⁽⁶⁹⁾の例などをあげて、段功の時代に元朝側が大理路管内の趙州において没官田を購入し、学田に当てることが可能であった例などを引いている。またそれだからこそ、のちに紅巾軍の雲南侵入に際し梁王把匝剌瓦爾密（バツァラワルミ）が段功の兵を借りてこれを鎮圧することも可能であったのだという。ただ、なぜこのような波が生じるかについては、両者の矛盾はしよせん統治階級内部のものであり、両者の利害が一致した場合には連合することもあり得たのだという以外に、具体的な説明は与えられていない。

しかし、両者の関係を時間的にいいますこし詳細に見ていくと、その関係の波が段氏総管の交替と奇妙に一致していることに気づく。つまり、段光の時期にこそ段氏は梁王との全面抗争を展開したが、その前後、段義と段功の時期にはかえって両者の関係は良好なのである。

特に注目されるのは、『野史』各本にはいずれも、段義が阿容禾（阿禾）の乱の鎮圧に功を立てて参政を与えら

れた、とされていることである。これが段義一段功の一派が台頭してくる直接の契機となったのだった。これは断片的であるというものの、天曆の内乱に際して段義が行省側に協力したということを明確に示している。『歷年伝』は段義の総管就任について、夾注で「野史」を引くにつづけ、「俊卒無子、義以功繼之」という。現存の『南詔野史』諸本にこの語はなく、『歷年伝』の編者倪蛻の挿入と思われるが、「以功繼之」というのはおそらく事実に近いであろう。段義は内乱に際し元朝側に協力し、その功によって総管として浮上してきたのである。そして段義の後を継いだと思われる段功は、その最期こそ野心を疑われ梁王に謀殺されたというものの、それ以前はむしろ一貫して親元的であったといってもよい。

いっぽう、天曆の内乱が発生した至順元年には、大理では段俊がいぜんとして総管の職にあった。『野史』の各抄本、王本などが段俊条で「至順元年諸王禿堅據雲南反」といい、段義条でふたたび「至順元年阿容木叛於中慶」と記述していることがまさにこの事情を反映している。つまり段義が総管の職を「継いだ」というのは、決して段俊の死によってその職を継いだわけではないのである。段俊に関して具体的な行動、とくに内乱中の去就に関してまったく何も伝えないのは、彼がまさに方慧氏のいうようににもっぱら自己の勢力拡大につとめていたか、あるいはより積極的に反元的行動に出ていたことをうかがわせる。そしてこの段俊の路線を引きついでと目される段勝・段光の時期にこの反元的態度は露見するのである。

六、段元関係の破綻と大理国の「再興」

段光と梁王の正面対決がはじまる年代は史料によつて差があるが、天曆の内乱の数年後、つまり後至元元年（一三三五）から至正年間の初めごろであると考えられる。⁽⁷⁰⁾ 方慧氏は至正六年以前は雲南に梁王はおらず、一二年には段功が総管を継いでいることから至正六一二の間、という説を立てている。⁽⁷¹⁾ しかし『南詔野史』類の段梁交戦に関する部分が明代以降の大理白族の民間伝承のようなものもかなりとりこんでいることは明らかだし、⁽⁷²⁾ 前述のように当時雲南王も中慶に常駐していたこともあり、雲南に鎮したモンゴル王を漠然と「梁王」と呼んでいる可能性もないわけではない。至正六年以降にこだわる必要はないであろう。

最初に元朝側が大理を攻撃した。『野史』各本には「番兵作乱」と曖昧な表現がなされているが、これはモンゴル軍だとみて間違いない。『歴年伝』はこれを解釈して「吐蕃」としているが、白崖（今の大理州南部、弥渡県の紅崖）から大理に至るといふ進路は東側から大理にいたるルートであり、西北のチベット方面から侵入してきたものとは考えられない。このとき段光側の守将である高蓬⁽⁷³⁾が寝返り、敵軍は長驅して河尾関（洱海の南端、現在の下関。南詔時代にはここに龍尾城があった）を破つたが、段光軍はここで防戦することに成功した。

翌年（ないし二年後）、今度は段光が張希矯、楊生、張連⁽⁷⁴⁾らを遣わして梁王を攻めた。結果は「止存三人」といわれるほどの大敗であったが、『野史』王本などには「讎を報ず」とあつて、これからも前年の「番」による攻撃がモンゴル軍のものであることがわかる。

さらに翌年、梁王がふたたび大理を攻めるが、段光側の大勝に終った。のち梁王が段光の守将高蓬を買収しようとして失敗し、これを殺すなどの事件が伝えられているが、二者の間の直接対決は発生していない。段光は『野史』や『歷年伝』では至正四年に没したことになっているが、碑文史料から二一年に存命であったことはすでに述べたとおりである。

抗争そのものに決着はつかなかったが、この時期に元朝側の認める大理総管が最終的に段義・段功の系統へ移っていったといえるであろう。段義・段功がこの際いかなる態度を示したかは不明である。だが、梁王の大理攻撃は、时期的にみても天曆の内乱時に反抗的であったことに対する報復であったと考えられ、だとすれば段義・段功はその後の動向をみても梁王側に協力的であったことが予想される。あるいはむしろ、この段・梁交戦自体、ある意味では段光・段勝派と段義・段功派の対決であったことというのではないだろうか。こののち主導権を得た段功派によって史実が整理されていくわけであるが、そこでは同時期に「総管」であったはずの段義・段功自身の挙動がまったく述べられていないこと、また梁王との抗争時に段光とともに、むしろ段光よりも主導的立場にあったと考えられる段勝が意図的に記録から抹殺されていることなどを考えると、このような疑いを持たざるをえないのである。

段光・段勝らに代わって主導権を得た段功は、右にも述べたように、至正六年には元朝が麓川の思可法を鎮圧するに際し、前鋒となって活躍している。さらに二三年には四川より紅巾軍が侵入して省城を陥したため、梁王は楚雄に逃れたが、段功は兵を率いて紅巾軍をしりぞけ、梁王を中慶に迎えた。これらの親元的な「活躍」にともなって、彼は蒙化知州から正規の大理総管に任じられただけでなく、雲南省参政にのぼり、紅巾軍撃退ののちに梁王

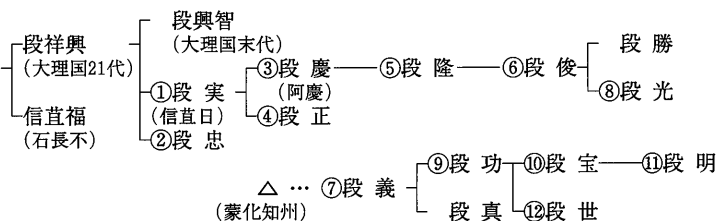
は段功に雲南行省平章を奏授し、娘の阿橿を彼に嫁させた。

名実ともに大理段氏の当主としての地位を確立した段功であったが、その急速な台頭にはこれをよく思わないものも多かったらしい。翌年春いったん大理に戻った段功は、梁王のもとに残してきた新妻阿橿を想うあまり、側近の諫めを聞かず、ふたたび中慶に上る。このとき梁王に讒言するものがあり、段功に中慶を併呑する意思のあることを疑った梁王は、阿橿に段功を孔雀胆をもちいて毒殺するよう迫る。阿橿はこれを段功に洩らし、大理に戻るよう説いたが、段功は聞き入れず、けっきょく梁王に謀殺され、阿橿もこれを追うように自害する⁽⁷⁵⁾。

段功の死後、大理ではその子段宝が自立して平章を称する。ここに段氏と梁王との敵対関係は決定的になり、年々兵を構える状態が続いた。鶴慶の知事楊昇のとりなしによっていったんは講和が成立したが長続きせず、梁王は七たび大理を攻めてこれを陥すことができなかったという。梁王は段宝に雲南省右丞をあたえ、二七年に紅巾軍がふたたび雲南に迫った時にはこれに救援を求めたが段宝は応じなかった。のち両者は修好し、段宝は元江（雲南東南部）から善闡に迫った舍興の反乱を鎮圧し、梁王は彼に武定公を授けた。しかしこのとき既に元の順帝は漠北に去り、明の洪武帝が即位しており、段宝は洪武四年（一三七二）⁽⁷⁶⁾に明朝に降表をおくり、漢唐の故事にならって朝貢をおこなうこと、もしくは元朝時代の職を保持することを求めた。このとき使者として段真という人物が送られているが『明史』卷三十三雲南土司伝一はこれを段宝の叔とする。

下つて洪武一四年、傅友徳の軍がいたり、梁王を降して雲南を平定した。このとき段宝の後を継いでいた段明は宣慰使を与えられるが、彼が傅友徳におくった書は雲南が古来中国の境域の外にあること、中原人のこれをとろう

図2 考訂後の系譜



とすることの無益を説き、また外藩として年ごとに一小貢、三年に一大貢することを求めるものであったという。⁽⁷⁷⁾『野史』各本の引く彼の書の末に「後理国段明頓首」としていることをみても、段氏の自立してふたたび大理の地に王たらんとする意志が明確にあらわれている。しかし元朝治下の一世紀あまりを経て、雲南地方の政治的・経済的中心はすでに昆明地区に移っていた。段氏がいかに伝統的権威を擁しているようとも、大理を中心に雲南を統一することはや不可能であった。けつきよく沐英・藍玉らの軍が大理に侵攻し、段世および段宝の孫(段明の子)苴仁・苴義を捕える。ときに洪武一五年二月二三日であった。⁽⁷⁸⁾のち苴仁・苴義はそれぞれ婦仁・婦義の名を与えられ永昌衛鎮撫・雁門鎮撫となるが、後理国滅亡ののち約一三〇年間続いた大理総管段氏の「政権」はここに絶えたのだった。なお『野史』各本は段明を段宝の子、段世を段宝の弟、明の叔、とするが『明史』卷三二三 雲南土司伝一は明・世とも段宝の子としている。

最後に、本稿でおこなった考訂をもとに段興智以後の段氏の系譜を図2に示す。

おわりに

元朝治下の中国に、さまざまな意味での二重体制が存在したことはよく知られている。雲南地方において、その最たるものは行省と梁王などモンゴル宗主との併存であった。

大理地区にもまた、雲南王をはじめとする宗王と段氏の大理総管という二つの機構が併存していた。さらに、本稿で明らかにしたように、段氏じたいが大理金齒等処宣慰使と大理路軍民総管という二つの職を保有していた。しかも、この二つの職を代々親子、叔甥あるいは兄弟といったように非常に近い血縁関係のものが担当している点が段氏総管のひとつの特徴といえるであろう。初代総管の段実^{II}信直日いらい、「信直」の称が次第に段氏のいまひとつの姓であるかのように扱われ、『滇載記』などの史料では歴代総管すべての名に「信直」の称が冠されているが、これも総管家の当主とその信直^{II}兄弟または先代の兄弟が共同して統治に当たるといっていい、という体制を反映しているに相異なる。それは後理国時代高氏に実権を奪われていた段氏が大理地区における主導権を回復するための対策であったのであり、同時に「滅国」ののち機構的な支えを失った段氏がその権力を維持するための努力の現れであるといえるのではないだろうか。

しかしこのような体制が容易に一家の中での相続権争いにつながることは、他のいわゆる兄弟相続の例にもなかった。いやむしろ、総管・都元帥の名を与える元朝側の恣意性が介在するぶん、このような不安定性は大きかったといえるだろう。実際に台頭してきたのは総管家では傍流の段義・段功であったが、これも段俊の代には雲南行省平章の高位にまでのぼりつめ、段勝・段光の時期にいたってますます自立の傾向を高める段氏の嫡流にくらべ、段義・段功が元朝側にとつては操縦の容易な存在に見えたからにほかならない。時あたかも天曆の内乱のち雲南行省全体が大混乱に陥っている時期でもあり、元朝側は大理の段氏が敵対勢力にまわることは何としても避けなければならなかった。

段勝・段光派と段義・段功派の抗争はこのようにある意味では元朝―梁王側の意図によって仕組まれたものであった。そして段義・段功が元朝を援けて着実に戦績をあげ、段氏総管の正統の地位を確立していったこと自体からいえば、その意図はみごとに的中したといつてよい。だが梁王との交戦で段勝・段功らが実力を消耗し、いつぼうで紅巾軍を退けた段功が雲南行中書省平章政事・大理総管軍民宣慰使・世襲都元帥⁽⁷⁹⁾にまでのぼりつめた時、今度は段功自身が元朝にとって危険な存在としてあらわれてきた。

そこで梁王は段功を暗殺したが、それはかえって段氏を反元的傾向のもとに一致させる結果をまねいただけであり、以後はむしろ段氏優位のうちに明朝に平定されるまでの雲南政治史は進んでいくのである。「後理国段氏」を自称したことが史料から確認されるのは段明からであるが、一代前の段宝もすでに、明朝への降表の中で、雲南地方を保有して自立しようとする意思を表明している。

だが、実のところ元朝に降伏・臣属するといひ、大理国を再興・自立するといつても、当の段氏にとってそれはどの違いはなかったのかもしれない。明朝とのやりとりの中で、段明をはじめ「大理乃唐交綏之外国、鄯闡実宋斧画之余邦」と南詔・大理国の例をあげて雲南地方が中国の境域の外にあることを主張し、明が梁王を打倒して中慶を平定すると「漢武習戰、僅置益州。元祖親征、祇緣鄯闡」と、歴代王朝が雲南に進出しても大理には至らなかったことを説いて明軍を拒もうとした⁽⁸⁰⁾。むしろこれは文飾であり、傅友徳が「汝段氏接武蒙氏、運已絶於元代、寛延至今」というのも当然である。しかし、ある意味では段氏の元朝に対する意識は最初からこのようなものであったとも考えられる。たしかにその支配領域は大幅に縮小されたものの、洪武一五年に段世らが明軍に捕えられた時点

ではじめて段氏の政権が消滅した、といっても決して過言でないだろう。そしてこのような政権の存続を許したことにしたいが、元代という時代のユニークさをあらわしているといえるかもしれない。

元代の雲南地方、とくに大理地区をめぐる政治関係についてはモンゴル宗王と段氏の関係、賽典赤時代の雲南行省による文教政策の影響など残された課題も多いし、段氏が属する「僰人（白人）」の文化的状況についても、南詔国後期から大理国時代にわたる白族先民の対外移民と関連して考察していく必要があるが、これらについては別稿にゆずりたい。

註

- (1) 後晋天福二年（九三七）に段思平が建国した大理国は紹聖元年（一〇九四）に高昇泰に篡奪されいったん滅びる。高昇泰の死後その子高泰明は王位を段氏に返還するが、再興後の段氏の政権を後理国と呼ぶ。ただし九三七年―一二五三年の段氏政権全体を大理国と総称することも多い。
- (2) 『元史』巻一二二 兀良合台伝。
- (3) 一九九二―三年に雲南西北部に契丹族の遺民が存在することが新聞報道され話題になった。孟志東『雲南契丹後裔研究』（中国社会科学出版社、一九九五年）参照。
- (4) 乾隆四〇年石印本。以下「胡本」と略記する。
- (5) 『大理叢書』金石篇（中国社会科学出版社、一九九三

元代雲南の段氏総管

林

年）。

- (6) 方齡貴「大理五華樓新出元碑史料價值初探（一）」『雲南文物』一五、一九八四年、二三―三九頁。
- (7) 李京『雲南志略』諸夷風俗 白人条には「諸王曰信直」とする。
- (8) 『元史』巻一六六 信直日伝には「賜名摩訶羅嗟」とあるが、同巻三 憲宗紀には「雲南酋摩訶羅嗟…來覲」、巻一二二 兀良合台伝には「擒其国王段智興及其渠帥馬合刺昔以獻」とあって、この称号はモンケがはじめて与えたものではない。実際には九世紀末の『南詔図巻』、十二世紀後半の張勝溫『大理国梵像巻』で南詔王隆舜らがすでに「摩訶羅嗟」の称をもって描かれている（李霖燦『南詔大理国

第七十八卷 二七三

新資料的綜合研究』台湾中央研究院民族学研究所、一九六七年)。これは一般にサンスクリットの *mañātāja* (大王) の音訳と解されており、ラシード・マッデーニン『集史』タビライ紀でも大理攻略に關して「MHARAZ (> Maharaz) すなわち『大王』を称するその王を捕え、これを伴つて帰還した」などを述べる (Rashid al-Din, *Jāmi' al-Tawarikh*, MS., Topkapı Sarayı Müzesi Kitüphanesi, Revan 1518, f.198b, l.18. イスタンブル本一九八葉裏一八行目; Boyle, J.A., *The Successors of Genghis Khan*, Columbia Univ. Press, 1971, p.247.)。Blochet の校訂本では「MHA-RAW (> Mahā-rāw)」に作る (Blochet, E. (ed.), *Djāmi' el-Tawārikh: Histoire générale du monde par Fadl Allah Rashid ed-Din*, Leyden and London, 1911, t.II, p.378)。⁹ リオネがこれに触れている (Pelliot, P., *Notes on Marco Polo* Vol.I, Paris, 1959, pp.177-179.)。¹⁰ なおこのような解釈に反対する見解もあり、たとえば中国社会科学学院民族研究所の徐琳氏 (白族) は「摩訶羅嵯」を *mu³¹ ho³¹ lo²¹ tsh³¹* と読み、白語で「蒙家虎氏族」の意味とする (「驛信、摩訶羅嵯、与民族關係」一九九六年一月、国立民族学博物館における研究発表論文)。

(9) 『元史』卷一六六、信苴日伝。

(10) 以下にも述べるようにこの「総管」はいわば段氏の得た肩書の総称であり、特に初期においては「大理国総管 (世祖紀中統元年六月)、大理国主 (同中統二年六月)、雲南総管 (同至元十二年正月) など一定しない。それ以降もむしろ宣慰使となるものが目立ち、後期には「段平章」とも呼ばれるように数代にわたり雲南行省平章を歴任している。「段氏総管」が決して一路の長官としての総管というだけではとらえきれないことは明らかであるが、他地域との比較分析も必要な問題であり、とりあえず史料の表現をそのまま用いておく。

(11) 『野史』胡本 卷上。

(12) 松田孝一「雲南行省の成立」『立命館文学』四一八—四二二号、一九八〇年、二五—二七二頁。

(13) 史料によつては段世を欠き、段明までの十一代とする。

(14) 明・楊慎撰とされるが、方国瑜は偽託であるとす。

『雲南史料目錄概説』(中華書局、一九八四年) 参照。『雲南備微志』所収本を使用。

(15) 明・蔣彬撰、嘉靖一一年刊本。

(16) 『元史』卷一二二 兀良合台伝。

(17) 明・諸葛元声撰。雲南民族学院翻印の油印本を使用。

(18) 清・倪蜕輯。李埏校点本 (雲南大学出版社、一九九二年) を使用。以下『歷年伝』と略記する。

- (19) 『元史』卷四 世祖紀一。
- (20) 松田前掲論文、二五五頁。
- (21) 『元史』卷一六六 信直日伝。
- (22) 『南詔野史』胡本 段興智条「世祖敕授王之弟信直日総管守大理。命之曰、向率我以臨爾境、衆挾國人之請、因從城下之盟、款附而忠勤益著。庸示至優之礼、以彰同視之仁。可革帝号、錫以虎符、總理大理、鄯闡・威楚・統矢・会川・建昌・騰越諸郡、撫恤已附之民、招集未降之国、卿其勉之。」なお『南詔野史』の他のテキストでは「総管大理・会川・建昌・騰永等処」につくる。胡本が『元史』信直日伝によって改めていることがわかるが、段氏の当初の管轄範圍をうかがう上では重要な異同といえるかもしれない。
- (23) 南詔国第一代の世隆以来、歴代の南詔・大理国王は皇帝号を自称していた。
- (24) 明・李元陽纂輯。十卷、嘉靖四二年（一五六三）成書。卷一・二のみ現存する。大理白族自治州文化局翻印の排印本（一九八三年）を使用。
- (25) 『元史』卷一六六 信直日伝。
- (26) 『元史』卷六 世祖紀三 至元四年八月。
- (27) 松田前掲論文、二五九―二六三頁。
- (28) 『元史』卷六一 地理志四。
- (29) 『元史』卷一二一 愛魯伝。

元代雲南の段氏総管 林

- (30) 爨焚軍については爨族（爨）と白族（焚）の混成軍であるという意見と、もっぱら白族によって編成された軍であるという意見がある。後者は『元史』兵志に爨焚軍とは別に落落（彝族）の軍団に関する記述があることを根拠とする。
- (31) 『元史』卷八 世祖紀五。
- (32) 方慧「行省・宗王・段氏并立時期的段元関係」『思想戦線』一九八九年第六期、六七―七二頁。
- (33) 『元史』卷一二五 賽典赤瞻思丁伝。
- (34) 『元史』卷一六六 信直日伝。
- (35) 『雲南備微志』卷八。明・阮元声著とあるが『雲南備微志』の編纂者王崧が諸本を校合したものである。以下「王本」と略記する。
- (36) 『新纂雲南通志』卷九二 金石考。
- (37) 『新纂雲南通志』卷九二 金石考。
- (38) 方齡貴前掲論文、三三―三三頁。
- (39) 清・馮甦纂修、道光元年刊本。
- (40) 佚名撰、尤中『契古通紀浅述校注』（雲南人民出版社、一九八九年）参照。ただし同書の「十一総管」条はほとんど『滇考』の引き写しであり、史料価値は高くない。
- (41) 『白族社会歴史調査（四）』（雲南人民出版社、一九八八年）。

(42) 筆者は実見していないが、木芹『南詔野史会証』（雲南人民出版社、一九九〇年）がこれを底本とする。以下南京本と略記。

(43) 冒頭に嘉靖庚戌（二九年、一五五〇）の「新刊南詔野史引」が付されている。以下淡本と略記する。

(44) 『南詔野史』南京本「段祥興、宋理宗嘉熙二年立、改元道隆。」また『故溪氏諡曰襄行宜德履戒大師墓誌並叙』（『大理叢書』金石篇、第一冊四一頁に拓片、第十冊一二頁に釈文をおさめる。以下同じ）に「道隆皇帝」の用例がある。

(45) 『大理叢書』金石篇、第一冊六六頁、第十冊一九頁。

(46) 『大理叢書』金石篇、第一冊四九頁、第十冊一四頁。

なお、ほんらい「制詔」とすべきであろうが、本碑ではあきらかに「聖詔」と誤刻している点に注意される。

(47) 『元史』卷四一上 百官志七。なおこれを手がかりに前述（註10）のような段氏「総管」の位置づけそのものに考察をおよぼすことも可能であると思われるが、碑文史料にみえる段氏の位階を総合的に扱う必要もあり、また文散官と武散官の關係など元代中国の官制運用全体ともかわつてくる問題もあるので、今後の課題としたい。

(48) 『大理叢書』金石篇、第一冊六九頁、第十冊二〇頁。

(49) 『大理叢書』金石篇、第一冊八六頁、第十冊二四頁。

(50) 『元史』卷三四 文宗紀三。

(51) 『蒙兀児史記』卷一一〇 段実伝の注

(52) 『大理叢書』金石篇、第一冊八三八四、第十冊三一二四頁。

(53) 『元史』本紀によれば後至元二年・六年に車里、木邦を征した事實はなく、これは至正元年・二年に車里の寒賽刀、六年に麓川の死可伐（思可法）を征したことを指すと思われる。だとすれば「至元」は「至正」の誤りとなろう。方齡貴前掲論文、三三三頁参照。

(54) 方齡貴前掲論文、三三三頁。

(55) 『大理叢書』金石篇、第一冊七九一八〇頁、第十冊二三頁。

(56) 高薬師娘については同碑に「迺故理開国公黑布變騰衝（闕）忝廉之雲仍、奉議大夫大理官司副事高通之長女」とある。『高氏源流総派図』（由雲龍『滇録』卷八所収）によれば、大理国を滅ぼして大中国を建てた高昇泰の次子高泰運が騰衝（騰越）に封じられて「黒演習」と号したとされる（布變、演習は『新唐書』南蛮伝によればそれぞれ清平官（宰相）、大府主将の別称）。また『元史』卷六十一 地理志四の騰衝府条にも「府酋高救」の名がみえており、薬師娘が後理国の高相国家の流れをくむことがわかる。

(57) 『明史』卷一二三 明玉珍伝。

- (58) 『明太祖実録』洪武五年正月癸丑。
- (59) 『大理叢書』金石篇、第一冊七七―七八頁、第十冊二二―二三頁。
- (60) 『大理叢書』金石篇、第一冊九六頁、第十冊二七―二八頁。
- (61) 大理市博物館に現存。
- (62) 方慧「天曆兵変之後的段元關係」『雲南社会科学』一九八九年第六期、七一―七六頁。
- (63) 『滇史』卷九。
- (64) 『元史』卷三四 文宗紀三。
- (65) 『元史』卷三八 順帝紀一。脱肩(禿堅)・敗狐(伯忽)は反乱者であるふたりを貶しめた漢字音訳。
- (66) 方齡貴「元述律傑事迹輯考」『中国民族史研究』(中国社会科学出版社、一九八七年)、三五―六〇頁。なお禿堅・伯忽らの反乱に関しては後至元六年(一二四〇)一月二五日付の昆明鄧竹寺あての雲南王阿魯(アルグ)の令旨碑(ウイグル文字モンゴル文)がある。道布「回鶻式蒙古文《雲南王藏経碑》考釈」『中国社会科学』一九八二年第三期、一九九―二一〇頁、方齡貴「《雲南王藏経碑》新探」『民族研究』一九九〇年第三期、六六―七三頁。碑文の反乱に関して述べた部分には、『元史』文宗紀では「万戸」とされている伯忽・阿禾らが禿堅とおなじく kŋbeŋid

元代雲南の段氏総管

林

- (kŋbeŋid「子供・息子」の複数で、「諸王」の意味にも使われる)とされているなど興味深い相違がある。
- (67) 『蒙兀児史記』卷一〇 段実伝。
- (68) 方慧「天曆兵変之後的段元關係」七一―七二頁。
- (69) 『新纂雲南通志』卷九二 金石考。
- (70) 『滇載記』、『南詔源流紀要』、『滇考』、『滇史』などは至大二年説(一二〇九)をとるが、段光の時期とあまりにもかけ離れており、あるいは至元二年の誤写であろうかとも思われる。
- (71) 方慧「天曆兵変之後的段元關係」七四―七五頁。
- (72) 例えば、ことあるごとに段光・段功や彼に嫁した梁王の娘阿儘が詠んだ詩が挿入されるなど、むしろ文学作品的な要素が多い。張文勛主編『白族文学史(修訂版)』(雲南人民出版社、一九八三年)参照。
- (73) この人物にも後理国の高相国家との関連が考えられるが、詳細は不明。
- (74) 『野史』王本は後の二人を李生・楊連につくる。
- (75) このくだりは郭沫若の劇本『孔雀胆』で著名である。「郭沫若全集」文学編第七卷(人民文学出版社、一九八六年)。
- (76) 『野史』王本のみ一三年とする。
- (77) 『明史』卷三二三 雲南土司伝一。

第七十八卷 二七七

(78) 『野史』南京本・淡本・王本は三月三日とするが、

二月三日とする胡本の記述が『明太祖実録』と一致する。

(79) 『歷年伝』卷五 至正二三年。

(80) 『明史』卷三二三 雲南土司伝一。

